

《仮称》予科練 平和記念館だより



町教育委員会生涯学習課 ☎888-1111(327)

平 成19年、新しい年のスタートです。皆さんは新年にあたってどのような抱負をお持ちでしょうか？

『《仮称》予科練平和記念館だより』は今回で6回目、これからは町にあった予科練や所蔵資料について、分かりやすく紹介していきたいと思っています。

今月号は、土浦海軍航空隊の絵はがきをご紹介します。

●絵はがきの歴史

日本で初めて絵はがきを作られたのは、明治33(1900)年のこと、外国人向けの私製観光絵はがきが始まりと言われています。明治37(1904)年日露戦争時に絵はがきブームが起り、戦局が好転し、戦地の様子や天皇の絵はがきなどが次々と売り出されると、郵便局前にはそれを買い求める長蛇の列ができ、我先にと押しかけたため、けが人まででたといわれています。また各地の名所絵や美人画などの絵はがきは、見たり送ったり、集めたりとたくさん楽しみがあり、夏目漱石や尾崎紅葉など多くの文人もとりこにしました。

しかし、現在もそうであるように、太平洋戦争当時も絵はがきは人々の生活に深く浸透しており、それだけにイメージ戦略に使用されることもあったと考えられます。

●「四銭貼ツテ戦線へ」

町では、「土浦魂!! 予科練便り」と題された絵はがき集(8枚入り)と、「若鷲の歌」(昭和18年古関祐而作曲)と

「決戦の大空へ」(同)の歌詞が入った絵はがき(8枚)を所蔵しています。これらは土浦海軍航空隊内の酒保(売店)で売られていたものです。

「土浦魂!! 予科練便り」は、たくましい若者が相撲をとる様子や日の丸の鉢巻きをして艦船勤務中の予科練生、荒れ海上を飛ぶ飛行機など勇ま



▲絵はがき集「土浦魂!! 予科練便り」

しい図柄が写實的に描かれており、切手を貼る場所には「軍事郵便」と印字されています。またもう一組の方は、ペン書きイラストの二色刷りで、予科練生を主人公にした映画「決戦の大空へ」(昭和18年)の挿入歌「若鷲の歌」「決戦の大空へ」の歌詞とともに飛び込みやカッター(12人乗りボート)訓練の様子が描かれています。

興味深いのは、この絵はがきを歌単位で区切ってみると、訓練の様子3枚と飛行服姿で空を見上げる予科練生1枚、訓練の様子3枚と白い事業服を身につけ素手でアメリカ人を押さえつける予科練生1枚という構成になっていることです。4枚目「生命惜しまぬ予科練の 意気の翼は勝



▲絵はがき

利の翼 見事轟沈した敵艦を母へ写真で送りたい」と8枚目「想ひでたのし白帆の故郷 鍛へしこの技攻撃精神 風切る翼の日本刀に刃向ふ敵無し 土浦魂」という歌詞に呼応したイラストになっていると思われませんが、同時に厳しい訓練を経た後の予科練生に期待されるイメージ、ということに見ることもできます。

これらの絵はがきが入っている袋の裏面には「エハガキハ小サイ姿テ御奉公 四銭貼ツテ戦線へ」と左上に小さく印刷されています。当時四銭切手の図柄は東郷平八郎で、現在の80円切手のように広く使用され、親しまれていました。また、「四銭」と言っている出るのが千人針に縫い付けられた五銭硬貨です。これは「四銭(=死線)を越える」というおまじないの意味があったといえます。そう考えると、「四銭貼ツテ戦線へ」という文句が、単に切手を貼るだけでなく、深い意味を有しているようにも思われます。

これらの絵はがきが、『予科練』というもののイメージを広めるのに一役買ったことは間違いありません。